

「大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成」プロジェクト

インタビューシリーズ第10回：文学部 野村鮎子先生

野村先生のご専門は中国文学、中国女性史。また、文学部の1回生向け科目「学ぶことと女性のライフスタイル」の企画・運営を一貫して主導していらっしゃいます。研究室に伺うと、机上に、現在「アジア・ジェンダー文化研究センター」で行っている女高師時代の留学生に関する調査資料の写真がありました。「満洲国」から送られた留学生の戦後の苦難についてひとしきりお話をお聞きした後、本学が育てたい学生像というところから話は始まりました。



■ 堅実な思考や社会対応ができる「女性リーダー」

「本学の教育理念で「男女共同参画社会における女性リーダーの育成」ということが第一に上がっていますね。「女性リーダー」という言い方は、女子大学として心地よく聞こえるキーワードだと思いますが、その内実がきっちり具体化されていないことから混迷が起こっているのではないのでしょうか。多くの先生方は、起業家の社長とかNPOとかで活躍する女性のことを言っているのだと思いますが、私が考える奈良女子大学にふさわしい「女性リーダー」というのは、堅実な思考と堅実な社会対応ができる女性なのです。」

「本学に来る学生層は、地方の真面目なご家庭に育てられた女性が多いですね。それゆえ堅実な思考や対応ができるのが本学の女子学生の良い資質だと思うのですが、そういう学生に対して、全員が全員、声高に自己主張できるとか、上手にプレゼンテーションができるとか、まるで政治家のような人間になることを求めるのは、はたして相応しいのかどうか。どんな企業でもNPOでも、堅実に思考して、財務運営をして、きっちり文章のつくれる人、きっちり計画が立てられる人、トップの理念を理解してそれを具体化できる人、というのが不可欠ですよ。学生がそういう存在になることを、うちの大学は目指した方がいいのではないかと思うのです。本学の女性職員の中でも、そういう方がいらっしゃいますよね。」

——皆がみんな、先頭に立つ社長ではなく、いろいろな生き方がある、ということでしょうか。

「いろいろな生き方がある、といっても、最近の学生

に再び増えてきている専業主婦志向は、どうでしょうか。1回生の授業で自分が期待するライフコースを書いてもらうと、「将来の夢は専業主婦」「子育てのための退職」とか書いてあるんですよ。うちはそういう大学ではないでしょう。確かに戦前の女子教育といえば、良妻賢母教育が連想されますが、女高師は良妻賢母を教えるための教師の学校、つまり職業婦人を育成するための学校であって、あなたたちが良妻賢母になってどうするの、と思いますよ。」

「地方出身の学生が多いせいか、1回生の時点での社会経験が少ないのも本学の特徴ですね。高校時代にアルバイト経験もないし、浪人経験者も少ない。だから、たとえば「年収」という言葉からしてピンとこない。母子家庭の平均年収が230万円と言っても、それがどういう金額なのか、実感がない。自分の家の年収がどれくらいあるか、知らない学生が結構多いと思います。私も田舎育ちだから、その感覚はわかりますが、それに対して、大阪の文化圏で育った子どもって、自分の家庭の経済状況とか社会的なレベルをきっちり認識していますよね。」

——それは地域性の問題でしょうか、それとも階層性の問題でしょうか？

「階層性の問題かもしれません。地方でもまじめな進学校を出ているから、均質的なところで育っているわけですよ。親がパチンコに行って帰って来ない、などということは、彼女たちには想像もつかない。親の離婚率は低い一方、母親の専業主婦率は高い。お母さんが働いている場合は教員か公務員が多いですよ。そういう学生層だということを知り理解した上で考

えないと、身の丈に合った「女性リーダー」育成はできないと思います。」

■ 「高度専門職業人」の困難

——「女性リーダー」の内実についてですが、もう一つ難しいのは、「高度専門職業人」という言い方がピンときていない、という問題があるように思われます。如何でしょうか。

「卒業生に人材派遣会社に就職した学生がいて、お得意さんは京大や阪大の理系の研究所なんだそうです。COEなどで雇う理系のスタッフの斡旋ですね。求められるのは、きっちり実験して、きちっと記録をとる、という堅実な仕事ができるスタッフで、彼女はその採用面接をしている。その際、奈良女子大の理系の大学院を出ていたら間違いないということで、そういうスタッフを派遣すると、とても喜ばれるんだそうです。その学生が、「先生、うちの大学って、よその大学の研究スタッフを養成しているの？」と言うのです。きっちり仕事ができる人がいるのは素晴らしいし、そういう時に奈良女子大学だと信用してもらえるのもありがたい。けれども、それは本学で唱えられている「高度専門職業人」とはちょっと違うのではないかと、思うのです。求められているのは研究助手にしか過ぎない。実験のスキルがあれば、食べて行くのには困らない。けれども、常雇いの研究職にはなれない。「高度専門職業人」というと、聞こえはいいけれど…。」

——内田忠賢先生のインタビューで、「研究者になりたいのなら、大学院は京大に行きなさい」というのもありなのでは、というお話がありました。そのあたりの感覚の、理系と文系とのギャップというのは、たしかにありますね。日々実験をして、組織的に積み上げていかなければならない理系と、基本的に一匹狼の個人商店の文系とは…。しかし、個別にお話を伺うと、本質的には同じ問題意識を持っておられて、響き合うところも多いのですが。

「皆さん、研究の質を下げたくないから「研究大学」という看板を下ろせないのだと思いますが、学生のニーズや立場を考えると、世の中に堅実な人材を送り出す大学として地歩を固めた方がいいんじゃないかと思えます。大学院は、出口がない閉塞感がある時代では難しい。それでも文系は、学生と教師がいれば、一対一で人を育てられる身軽さがありますね。それに対して理系は、研究大学でなくなったら先がない、という違いがあるのではないのでしょうか。」

■ 「ちゃんと」書けることを！

——それでは、先生のイメージしておられる「堅実な」学生

を育てるためには、どのような教育が必要だ、とお考えですか。

「ちゃんと書ける、ということが重要だと思っています。小論文では受験生の体験を書かせることが多いのですが、実は体験型の文章というのはあまり意味がない。そうではなくて、ちゃんと素材が読めて、理解ができて、さらにそれを自分の言葉で文字にできる、文章にできること。世の中には、リーダーが語った言葉を、夢を、きちんと整理して文章にできる人が必要でしょう。そういう意味で、書かせる授業はもう少し充実させるべきだと思います。それは大人数では難しいので、本学の特性を活かすということであれば、教養の授業であっても、なるべく少ない人数で、きちんとしたものを書かせる。言語文化学科の学生でも、1回生と4回生のレポートを比べると、明らかに4回生の方がきちんとした文章で書けている。それは訓練の賜物だと思います。」

「私は教養の授業で他学部の学生のレポートも読むのですが、入試で国語が課されていないせいか、やはり文章力には大きな差があります。これでは実験のレポートだって書けないだろう、と心配するのですが。」

——そのあたりは理学部でも生活環境学部でも、先生方は同じ問題意識を持っておられると思います。皆さん、学生が「書けない」とおっしゃいます。理学部の野口哲子先生は、3、4回生にマンツーマンで英語論文の翻訳の訓練をして、ようやく書けるようになる、そして論理的に思考できるようになる、と。

「学生たちが書く動機になっているのは、フィードバックされる、ということなのです。辛抱強く書かせて、丁寧に見て添削したり応答したりするのは、大人数では辛い。ちゃんと教えたら、格段に差がつかますよ。」

——「ちゃんと」というのは、具体的にはどういうことですか。

「きちんと要約して書くことです。新聞記事でも何でもいい。この論文に書かれていることを自分の言葉でまとめる、ということです。最初、言葉は使えないんですけども、そのうち使える言葉が増えてきますから、そうすると書く能力は目に見えて上がります。」

——ある意味、それは科目にこだわらず、どこでもできる、ということですかね。

「そうです。理系の人であれば、理系の論文を読んで、そこに書かれていることを正確にまとめるということです。最初は300字とか、次に800字とか、次第に増やしていく。」

「そこで授業運営を工夫しないとイケないのは、書くということが恥を見せるということだ、という点です。最初は、皆に見てもらって、誰かに添削してもらって、自分の文章力のレベルを認識するところから始めないとイケないから、大変です。書けない学生はコンプレックスを感じますし。かく言う私も、大学院進学前は高校教師をしていたので、書くのには自信があったのですが、大学院に入って論文を書いた時、自分は論理的な日本語が書けないということを強く認識しました。先生に徹底的に直されました。」

——言語文化学科では、そういうトレーニングのプロセスは確立しているのですか。

「残念ながらプロセスまでは行かないんですが、レポートが多いのは伝統的ですね。ともかく学生は読まなければいけないから、レポート課題も多い。教員の立場からすると、へんてこりんな日本語のレポートを読むより、テストの方が簡単なのですが、わりと皆さん、レポートが多いです。そのあたりは学部や専門によって差があるかもしれないので、調査をされたら如何ですか。専門によって学生がいくつレポートを書いているか。それによって書く力に差が出ているかもしれません。」

■ 「堅実さ」と社会意識

——再び、育てたい学生像の問題に戻ります。先程の人材派遣の例もそうかもしれませんが、「堅実さ」というのは、しばしば社会のメインストリームに単にうまく利用されてしまうことがありますね。自分の仕事が社会のなかでどのような意味を持つのか、そういう社会意識に裏付けられた「堅実さ」が必要だと思うのですが。

「確かにそう思います。堅実な仕事ができる人ほど、社会の体制の中で利用されていますよね。」

——お茶大と比べても、本学には歴史的にそういう体質があるような気がします。

「そう思います。かつて「満洲国」の教育部は、東京女高師ではなく、敢えて奈良に留学生を送りました。それは、東京のような派手なところではなく、奈良に堅実さを求めたからです。でも、こうなったら腹を括って、その道を進むしかないんじゃないでしょうか。身の丈に合わない夢を追うのはやめて…。企業も、「お化粧は上手じゃないけど、ちゃんと仕事をする人がほしい」と思っているところは、うちの学生を雇ってくれます。」

「改組の話の中で一時、取り沙汰されたように、文学部まで実学志向、資格教育志向になったら、それこそ堅実な文学部教育は瓦解してしまうような気がします。実学志向へと転がりだしたら止まるところを知らず、坂を転げ落ちるように、多くの大学の中に埋もれてしまうのではないかと恐れています。」

——一般には「堅実さ」は、しばしば実学志向と結びつきますよね。それとは異なる、社会意識を伴った「堅実さ」を育てるためには、どのような教育が必要だとお考えですか。

「私の言う堅実さとは、実学とは少し違う意味です。税金を使って少人数教育をやっている以上、私たちにほんちんとした社会を運営する女性を育てる義務があると思いますし、学生にもそれに応える義務があると思います。その意味で「夢は専業主婦」と公の場で言うてはばからない幼い学生を、どう鍛えるかということが課題ではないかと思っています。」

「大半の学生はできうる限り生涯フルタイムで働きつづけたと考えています。しかし、学生同士の討論になると、グループの中に専業主婦になりたいと言う学生が一人でもいれば、「人はそれぞれ」「人生いろいろ」とお互いに議論をシャットアウトしてしまう傾向があります。そここのところのシャットアウトを取っ払って、専業主婦という生き方を提示されてきた前段階を学習すれば、女性は生き方を自ら選んできたように見えて、実は社会や経済の変転の中で選ばれてきたということが見えるようになる。よく言うところの「個人的なことは政治的なこと、社会的なことである」ということを、きっちり気づかせる教育が必要だろうなと思います。私は学生に「専業主婦になりたいと人前で言うな、少なくとも大学生をやっている間は言うな」と言います。そういう態度で臨めば、学生は賢いですから、ちゃんと自分のことを考える。実際、就職活動でそんなことを言いませんでしょう。甘えが許される環境だという認識があるから、そういうふう言うんだと思うんです。1回生の時の教育は大事だな、と思っています。」

■ 「学ぶことと女性のライフサイクル」： 教養教育としてのジェンダー論の学び

——専業主婦になりたいと思うのは本人の自由かもしれないけれど、公の場で言うべきではない、という判断は、どのようにしてできるようになるのでしょうか。お話を伺っていて、それは教養教育の課題でもあると思いました。

「「学ぶことと女性のライフスタイル」は、本当は教養

科目として開講しなかったのですが、制度上、できなかつたんです。うちの大学のシステムは、教養科目を担当すると単なる負担の持ち出しになって、どこからも支援を受けられない。それで他学部の先生の協力が得られなかったの、仕方なく。でも、私は教養科目のつもりなのです。本当は、前期に、本学の歴史も含めて女性がどう生きてきたか、たとえば大正・昭和の女性雑誌なども材料にしながら、しっかりと学んだ後、後期で、女性をテーマにしたゼミを、じっくり時間をかけてやりたい。今の「学ぶこと…」のミニゼミ7回では、学生たちは話し足りないと感じて自主ゼミをやるのですよ。それを「ジェンダー」というタイトルできちんと位置づけるのが私の願いです。」

——公の場で「専業主婦になりたい」と発言することが何故ふさわしくないかを理解するためには、歴史的、社会科学的な認識が必要ですね。それを「学ぶこと…」では、やっていますよね。

「ジェンダー論とかフェミニズムの歴史のプログラムを組むことは簡単にできますけども、より考えさせる時間を与えないことには彼女たち自身のものにはならない、というのが私の持論です。ジェンダー論は、何か読んだだけで、すんなり理解できますか。できない。まず気づきから始めないといけないし、気づきの次に本を読んで理論を考えないといけない。次にそれをあてはめて自分のことを考えないといけない。絶えず思考を鍛練しておかないと理解できない。」

「それ無しに、単に今風のキャリア開発のセミナーだけを受けて、女は頑張らないといけないというモチベーションだけ高められると、へこんだ時に自分は落伍者だと思っちゃうんですよ。自分が努力しないから就職できないんだ、仕事を続けられないんだ、と自分を責めてしまう学生が多い。そうではなくて、それは社会のシステムの問題なんだ、今の社会では女性に困難が待ち受けているんだ、ということをはっきり予習させた方がいいと思うんです。「それはあなた一人の問題ではない、あなたの問題であると同時に、あなたの友だちの問題であり、後輩の問題だ」という広い視点があれば、自分が何かうまくいかなかった時も次のステップに踏み出せるのではないか。行動を起こすこともできるのではないか、と思っています。」

■ 女子大学としての覚悟

「よく、女子大学にいと男性に頼らずに働けるようになる、と言いますよね。でも私は、男に頼らずというよりは、男性の目を気にせず自らを発揮できる場だと思っています。女子学生というのは、人からどう

見られるかをとても気にする年代です。共学の場合は、特に異性からどう見られるかを意識して生きている。その場の関係性を女性は判断するんですね。この男性は頼りないから私がリーダーシップをとろうとか、この男性は頼りになるから自分はより添う立場でいようとか。非常に柔軟で、関係性をつくるのが上手です。それは大切なことでもあります、変わり身の速さや柔軟性を身につけるあまり、自分が本当にやりたいと思ったことができないことがある。なくてもいい無駄な関係性を省くことができるのが、女子大学を居心地がいいと感じる理由なんだと思います。」

「それともう一つ、女性の中で秩序や関係性をつくるのは大変難しいですよ。女性の研究会を始めた時、年功序列でもできませんし、声の大きさでもできませんから、とても工夫が必要でした。女子大では、女性の中で関係性をつくる経験ができる。そうすると、彼女たちが社会に出て働く時には女性労働者が増えているでしょうから、係長や主任の立場になってリーダーシップをとる、あるいは女性の上司ができた時に、うまく関係性がつくれるのではないかと考えています。また、そういう女性同士のリーダーシップと同時に、シスターフッドもうまく醸成されるといいなと思います。女子大は、女性に対する共感をもつ、助け合いができる、いい場所なんではないかと。私も、いつも最後に頼るのは女性研究者の仲間ですから。」

「私の座右の銘なんです、「義を見てせざるは勇なきなり」という言葉がありますでしょう。仕事も子育ても忙しい、でも後輩がセクハラされたと泣いてきたら、引き受けて、上司のところに行ってちゃんとやってあげべきだと考えて、賢く行動する女性を育てたい。シスターフッドがあり、ちゃんと交渉力もあり、逃げずに責任を引き受ける女性を育てたい。それが、私の目指す女性リーダーです。」

「女子教育史を考えると、女の学問は天から与えられたものではありません。長い時間をかけて獲得してきたものです。「満洲国」からの留学生だって、その歴史です。それは本当に貴重な財産だと思いますよ。それを、女子大だからという世間向けのパフォーマンスでやっていたら駄目ですよ。教員にも学生にも、女子大学としての覚悟を求めて然るべきだと思います。」

——ありがとうございました。「女子大学としての覚悟」、肝に銘じて、私たちも逃げずに引き受けて、このプロジェクト、進めて行きたいと思います。

(2011年10月27日・12月14日 インタビュアー：甲斐・西村)

■ センター員・センター運営委員

センター長	西村 拓生	文学部
センター員・ センター運営 委員	天ヶ瀬 正博	文学部
	甲斐 健人	文学部
	藤井 康之	文学部
	保田 卓	文学部 (文学部選出運営委員)
	辻 敦子	文学部
	中沢 隆	理学部
	根岸 裕子	生活環境学部
	鮫島 京一	附属中等教育学校
	二田 貴広	附属中等教育学校
	大野 智子	附属小学校
センター運営 委員	河田 慎太郎	附属小学校
	柿元 みはる	附属幼稚園
	山内 茂雄	理学部選出
センター特任 助教	塚本 幾代	生活環境学部選出
	谷口 雅彦	人間文化研究科選出
	盧 珠妍	「教員養成機能の充実」 プロジェクト担当

学内から附属学校園への
連携計画依頼について

学内から附属学校園への研究協力依頼は、教育システム研究開発センターの各学部のセンター員を通して、「連携研究依頼状」を、実施責任者による記入・捺印の上、ご提出ください。

また、大学と附属学校園の連携の実績を記録するため、「連携研究報告書」を、研究実施年度の年度末までに、学内便にて学務課を通して総務・企画課附属学校係まで提出してください。

「連携研究依頼状」および「連携研究報告書」は、教育システム研究開発センターのホームページに掲載しています。メニューから「学内から附属学校園への連携研究依頼について」のページへ進んでください。

■ 2012年度 教育システム研究開発センターの事業予定

1. 附属幼稚園・小学校における幼少一貫教育カリキュラムの研究

- ・昨年度で終了した文部科学省の研究開発学校としての事業をうけて、「初等教育学校」に向けた継続的な取り組みを研究面からフォローアップ

2. 附属中等教育学校のSSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）への協力

- ・SSH全般に関する運営指導、助言
- ・中等教育におけるリベラルアーツ教育を目指す新設科目「コロキウム」の企画・運営・検討のサポート
- ・「コロキウム」における若手教員のキャリア形成過程に関する臨床教育学的研究

3. 高等教育研究プロジェクト：大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成

- ・インタビューシリーズの継続
- ・学生の履修、学習の状況に関する調査の実施
- ・新たな教養教育カリキュラム試案の提起、議論の場の設定、成案化
- ・大学教育に関するシンポジウム開催

4. 文部科学省「教員養成機能の充実」プロジェクト：附属学校での質の高い教育実習による現代的教育課題に対応した教員養成の改革

- ・SSHの国際交流プログラム（SCoPE、ASTY Camp）と「コロキウム」、幼小一貫教育プログラム等への実習生の参画（スーパー教育実習）の企画、運営
- ・実習体験の臨床教育学的省察プログラムの試行と検討
- ・教職科目、教育実習におけるICT機器の活用状況の調査、検討

5. 高大連携特別教育プログラムのフォローアップ

- ・ガイダンス、定期面談、アンケートの実施

6. 国立大学協会「震災復興・日本再生支援事業」：問題解決力を備えた次世代を担う中高生の育成事業（予定）

- ・OECD東北スクールへの中等教育学校の教員・生徒および本学学生の参画のサポート

7. ニュースレター、ホームページ、センター紀要による情報・研究成果の発信

1300年の呪縛?——センター長あいさつ

教育システム研究開発センター長 西村拓生 (文学部)

本年4月より教育システム研究開発センター長を仰せつかりました。

本センターは、奈良女子大学がその伝統ある附属学校園を大切に活用して行くことを明確にするために、幼稚園・小学校・中等教育学校を全学附属に改組すると同時に構想され、2004年に創設されました。きっかけは「附属の活用」でしたが、それにとどまらず、大学を含めた学校教育の全体を対象として、ポスト産業化社会にふさわしい新しい教育システムを研究・開発して、そのモデルを提案して行くことを目指していました。

しかし、センターの創設に至る歩みは、必ずしも順調ではありませんでした。当時の学長と評議会に賛同はいただいたものの、いざ具体的に実行段階になると「諸般の事情」で話が進まない。結局、同時期に連携しつつ同じ状況に対応していたお茶の水女子大学に、時期的にも規模でも大幅に遅れをとったスタートとなりました。当初からこの附属改組とセンター構想に関わっていた私には、内心忸怩たるものがありました。

ちょうどその年、懇意にしていた附属小学校の先生から誘っていただき、3月12日の東大寺の「お水取り」本番に二月堂の堂内で参拝する機会に恵まれました。深夜に続く読経と全身を叩きつけるような祈り、そして過去帳の読み上げと続く中でトランス状態に巻き込まれつつ、「ああ」と思いました。ここではこの「行」が1300年近く、戦乱の中でも一度も欠かさず続けられてきたとのこと。奈良というのは、そういう風土なのだ。時間の流れ方が違う。その中で、一年、二年で改革などとあがいても、所詮、通用する相手ではないのか、と。

それから八年。本センターは初代内田聖二先生、二代森本恵子先生というお二人のセンター長のもとで、附属との連携に関しては着実に成果を蓄積してきました。そして現在、今度は大学本体が大きな変革の波に直面しています。その状況下、「大学も含めた」

新たな教育システムの構想を目指した本センターの当初の志を呼び覚まし、外圧で変えられるのではなく、私たち大学人が自ら奈良女子大学を創って行くための触媒に、このセンターがなれないだろうか、と思います。創設当時、理学部の評議員としてこのセンターの趣旨を最もよく理解してくださっていた野口誠之・現学長からも、この度のセンター長就任にあたって、そのようなエールをいただきました。

東大寺に比べれば本学はずいぶん「新しい」けれども、おそらく1300年の風土と無縁ではないでしょう。「奈良の寝倒れ」という言葉も、その後知りました。また他方で、「どの子どもにもある新しきもののために、教育は敢えて保守的でなければならない」というH.アーレントの至言も、あらためて頭をよぎります。奈良女子大学は、どのように変わるべきなのか。そもそも「変わる」とは、どういうことなのか。——その答えは、奈良女子大学の大学人が自ら議論して作り上げて行くべきものだと考えます。本センターは今、その触媒となることを目指しています。昨年から始めている「大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成」プロジェクトは、そのための試みです。附属校園とのいっそう緊密で有意義な連携の推進とあわせて、あらためて皆さまのご理解、ご協力をお願いする次第です。

Newsletterバックナンバーのご案内

「大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成」プロジェクト・インタビューシリーズ

Newsletter 15 (2011年7月7日発行)
センターの新たな高等教育研究・開発プロジェクトの構想と協力をお願い

Newsletter 16 (2011年10月1日発行)
第1回：角田秀一郎先生 (理学部)
第2回：森本恵子先生 (生活環境学部)

Newsletter 17 (2011年10月21日発行)
第3回：野口哲子先生 (理学部)
第4回：内田忠賢先生 (文学部)

Newsletter 18 (2011年11月20日発行)
第5回：今岡春樹先生 (生活環境学部)
第6回：塚原敬一先生 (理学部)

Newsletter 19 (2011年11月30日発行)
第7回：三野博司先生 (文学部)

Newsletter 20 (2011年12月25日発行)
第8回：増井正哉先生 (生活環境学部)
第9回：植野洋志先生 (生活環境学部)

■ 奈良女子大学教育システム研究開発センターニューズレター 21 ■

2012年4月10日発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

住所：〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 204

TEL.: 0742-20-3352

Website: <http://www.nara-wu.ac.jp/crades/>mail: crades@cc.nara-wu.ac.jp